

## 2025 年度 活動計画(案)

4 月	例会& 食事会 史談会通信 No.60 号発行
5 月	名護屋城博物館&陣屋巡り 史談会通信 No.61 号発行予定
6 月	史談会通信 No.62 号発行予定
7 月	史談会通信 No.63 号発行予定 会報 No.14 発行予定
8 月	大橋先生の講座 史談会通信 No.64 号発行予定
9 月	史談会通信 No.65 号発行予定
10 月	九州陶磁文化館企画展見学 史談会通信 No.66 号発行予定
11 月	史談会通信 No.67 号発行予定
12 月	史談会通信 No.68 号発行予定
1 月	史談会通信 No.69 号発行予定 会報 No.15 発行予定
2 月	史談会通信 No.70 号発行予定
3 月	史談会通信 No.71 号発行予定

4 月 19 日、新年度の初会合をキツチングランマにて参加者 7 名で昼食を摂り歓談をしながら活動計画について話し合っていました。

今年には戦後 80 年になるのを機に、佐世保などの防空壕を見学する案が出て、涼しくなる秋の時期を待って見学を予定しています。

5 月 23 日は名護屋城博物館を訪問し、久し振りに家田淳一館長にお会いして館内と城址の案内をして頂きました。

6 月 13 日は山口信行氏の「私的・

柴田コレクション解説」は、独自の視点でお話頂き、有意義な時間を過ごすことができました。

7 月は会報第 14 号の発行、8 月は大橋先生の「日本磁器生産の始まりと海外輸出」の演題で講座開催が決定しており、今年も楽しい充実した活動が続きます。

10 月には九州陶磁文化館の企画展「初期伊万里ビッグバン日本磁器始まりの全貌」の鑑賞など、後半も楽しく活動が続けて行く計画です。

## 新年度は会食でスタート！

## 会報



有田史談会

事務局

佐賀県西松浦郡有田町上幸平 1-8-5

TEL 090-4740-4752

HP arita-sidankai.sub.jp/

✉ arita-sidankai@hotmail.com

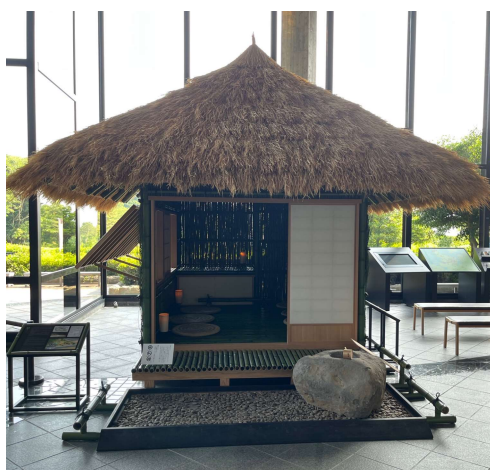
## 名護屋城博物館を訪問！

5 月の活動では以前から計画していた名護屋城址と陣屋巡りを実施しましたが、肝心の陣屋巡りは見送りになりました。名護屋城博物館の家田淳一館長の表敬訪問を兼ねて訪れました。

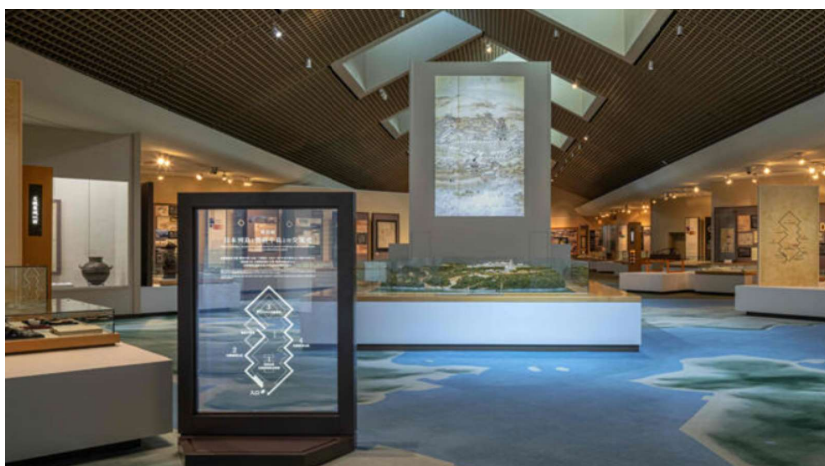
リニューアルされた館内と名護屋城址を館長の案内で見学、エントランスホール入口には新たに明らかになった草庵茶室が展示され、奥には



木下延俊陣屋入口



エントランスホールの草庵茶室



リニューアルされた名護屋城博物館内の展示室

木下延俊陣跡への入口も新設されていました。

展示室では築城から城割り（破却）まで僅か 7 年間しか名護屋城が存在しなかったことを知り驚きました。

展示室には「黄金の茶室」が常設展示され、秀吉の権威と財力を見せつける舞台装置に圧倒されました。

博物館見学の後、大手門から三の丸、本丸、天守台まで家田館長の案内で散策し、楽しい研修になりました。



## 初夏、響く滝音

旅の記憶を刻む場所へ

井手 邦男

令和7年6月中旬、コロナ禍がようやく落ち着き、8名の仲間たちと久しぶりに遠距離での宿泊旅行に出かけてきました。今回のメンバーは、「前平会」という親しい仲間の集まりです。「前平会」は、日頃から交流を重ね、忘年会や新年会、還暦・古希・喜寿といった人生の節目を祝い合いながら、長年にわたって親交を深めてきたグループで、現在の会員は総勢10人、個々人の都合もありその中の8人が参加し、心に残る旅を共にすることになりました。

佐賀空港を朝一番の東京行きで飛び立ち、向かったのは、埼玉の川越市、栃木の草津温泉、そして日光東照宮を巡るルート。それぞれの場所に個性があふれ、心に残る風景や出会いがたくさんありました。

川越では、蔵造りの街並みや時の鐘など、どこか懐かしさを感じさせる風景に触れて楽しみました。草津温泉では、湯畑の湯けむりに包まれ、肌にやさしい温泉に浸かって心も身体もゆったりと癒されました。そして日光東照宮では、荘厳な社殿と静

謐な空気に包まれ、時の流れがゆっくりと過ぎていくような不思議な感覚に浸ることができました。

そんな中でも、今回の旅で特に心を打たれた場所があります。それは、群馬県沼田市にある「吹割の滝」です。正直なところ、旅行の計画段階ではあまり期待していなかったスポットで、名前すら知らないまま現地を訪れたのですが、滝の前に立った瞬間、その印象は一変しました。

幅30メートル、落差7メートルという数字からは想像できないほどの迫力。まるで大地が真っ二つに割れ、そこへ川の水が吸い込まれていくような、不思議でダイナミックな光景が目の前に広がっていました。増水した水が勢いよく流れ落ちる音



「吹割の滝」の周囲にある遊歩道

は「ゴゴゴツ」と響き渡り、その轟音が足元から伝わってくる感覚は、まさに大地そのものが震えているようでした。思わず立ち尽くしてしまふほどの力強さで、自然のエネルギーを全身で感じることができました。

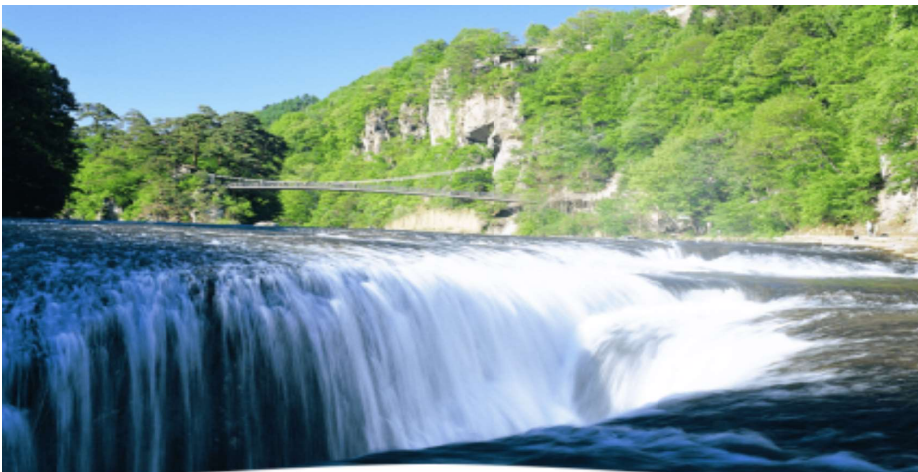
滝の周囲には整備された遊歩道があり、滝を上から、横から、さらには間近からも眺めることができます。「浮島橋」では川を渡ることもでき、目の前の景色にすっかり溶け込んでしまったような錯覚を覚えるほどでした。足元に広がる清流、岩肌を流れ落ちる白い水、周囲の木々の緑、そしてそれらすべてを包み込む澄んだ空気―まさに五感で自然を味わう体験でした。

空気はひんやりとしていて、心地よい初夏の涼しさを感じさせてくれました。何枚も写真を撮ったのに、「この迫力はカメラじゃ伝わらないね」と思わず口にして、携帯で動画を撮ってみたい、みんなであれこれ感想を言い合ったり、そんなひとときも含めて、大切な思い出となりました。

また、今回の旅で想定外だったのは気温の高さです。6月とは思えないほどの暑さで、各地で30℃を超

える日が続き、照りつける日差しに汗ばみながらの観光となりました。それでも、その暑ささえも旅の一部と感じながら、自然とともに過ごす時間に心から癒されました。

今回の旅は、心の奥に眠っていた感覚が呼び起こされるような、そんな特別な体験となりました。仲間と過ごした3日間は感動にあふれた、忘れられない初夏の思い出となりました。



群馬県沼田市にある「吹割の滝」

# 米の値段と物価

鶴 一樹

今回は朝日新聞社刊行の「戦後値段史年表」から引用したものです。

敗戦後、日本人はほとんどが食糧難でほぼ飢餓状態のスタート。闇市が大活躍した。米、芋、野菜を求めて市場へ。公定価格の5倍10倍を上回るヤミ値で売られていた。

こんな状況の中、佐賀の裁判所判事、山口良忠氏。法を守る信条の人でヤミを拒否してカネはあっても配給だから子供の口にはいるのがやっとなかったろう。昭和22年37歳で餓死したのである。

やがて日本政府はアメリカGHQに救援を求め急場をしのいだ。(カリフォルニア米や小麦、缶詰を緊急輸入)

そして、朝鮮戦争(昭和25〜28年)特需がきて、経済成長。物価も賃金もぐんぐん上がってバブルでウハウハ。ジャパンアズナンバーワン。そして30年賃金の上がらぬ現在であります。

コロナ、ウクライナ、カザで主食の米が注目された。1年前の5キロ2000円が4500円となった。令和の米騒動。古古古米のブレンド米で3700円で様子見している。新米の出る10月いくらで買えるだろうか。

## 一樹のメダカ通信



メダカの大量死。ここ10日ばかりで大きいヤツから70〜90匹ぐらい死んだ。1週間前一夜に50匹ばかり死んでいた。手入れは充分している。暑さが尋常でないのか。タライに入れているスイレンが大きく面一杯に拡がっている。酸素欠乏か？植物は酸素を出す方だろうか？しかし、日々卵がかえって2ミリぐらいの子があつという間に5ミリ〜1センチになる。数百かえっている。世代交代しています。

## 物価の変化

	昭和20 1945	25 1950	30 1955	35 1960	40 1965	45 1970	55 1980	63 1990	平成元年 2000	12
米 5kg 900倍	1.8 10 38 111 196 222 310 382 435 448 615 800 1615 1833 1922									
日本酒 1.8L 16倍	12円	550円	950円	835	835	710	1180	1600	1750	1910
アンパン 12倍		10円		12 15		30 40 50 80		100	120	
コーヒー(喫茶店) 90倍		5円	20 30	70		100	180	230 300	450	
そば 17倍		15円		40		100			260	
豆腐 12倍		12円		15		35			120	
日雇い 1600倍		7円 50	311	494		1850	6550		11021	
公務員初任給 350倍	540円	2300	4836	5500	9200	12900	36100	101600	157300	180500
大工の手間賃 550倍		35円	180		800 1000	2000	7022	12030	16040	19690
自動車 10倍		16万	32 60	60~70		70~100	100~218		150~300	
背広 20倍	1000円	4000	8000	18000	25000	55000	12万		20万	
床屋 1000倍		3円	60	140	280	560	1400	2500	3000	
世 相	「君の名は」？ プロレス力道山 月光飯面 ポパイ 三億円事件 ビー・ボリス事件 オリオンビルズ事件 吉原ちゃん事件 スーパースター事件 堀江謙一事件 スーパースター事件 太平洋横断 小野田さんバングから帰還 万博 バブル									



## とりとめのない話

坂井 勝也

4月22日の長崎新聞に「県内初  
夜間学校が開設・新入生 学ぶ喜び  
分かち合う佐世保・祇園中」とい  
見出しで掲載されていました。

孫が小学校5年生から不登校でし  
たので、母親と一緒に入学しました。  
佐世保では初めての夜間学校と言  
うことで、テレビ等マスコミから沢



取材を受けたとのこと。入学生  
は20名程度、最高齢のかたは、8  
5歳。私より3歳上ですが、昭和1  
5年頃の日本は戦時中で、学校に行  
きたかったけれど行けなかったの  
でしょう。その方は入学出来たのが嬉  
しくてたまらないでしょう、全て  
に積極的で、一緒に入学した生徒は  
85歳の方に巻き込まれて、特に孫  
娘は勉強が好きになり、午後4時か  
ら始まる夜間中学に一日も欠かさず  
出席しております。

私事ですが、5月5日に、庭の木  
の手入れをしていて、すべて大き  
な庭石で頭を強く打ち、救急車で病  
院に運ばれました。3日間は記憶が  
なく、天国を彷徨っている夢を見ま  
した。4日目に意識がもどり、病院  
の正面に立ちはだかっている唐船城  
を見つめていました。

入院から1カ月後に退院し、現在  
は歩くこととしゃべることに注意し  
リハビリを続けています。  
皆様には大変ご心配をお掛けしま  
した。



## 猿田彦祭と庚申信仰

前田 順三

戸杓地区で七月二十五日の祇園(夏  
祭り)の後の最初の庚申(こうしん・  
かのえさる)の日に猿田彦祭という祭  
りが毎年行われる。

祭りと言っても戸杓の入り口付近  
にある猿田彦大神の石碑の前に地区  
の役員が揃い、陶山神社の宮司さん  
が神事を執り行い、その後戸杓公民  
館で宴会となる流れであるが、これ  
は現在の有田の町ではどこでも行わ  
れていないであろう庚申信仰、庚申  
待の名残りであると思われる。

江戸時代までは全国各地で盛んに  
行なわれたようであり、庚申塔、庚



戸杓・猿田彦大神碑

申塚というものもあちらこちらに存  
在する。しかし明治初年の神仏分離  
(判然)令により、ほとんど庚申待は  
行われなくなったようである。それ  
は庚申待でお祀りする祭神、本尊が  
神道系では猿田彦神、仏教系では青  
面金剛(しょうめんこんこう)という  
神仏習合であり、元来が中国の民間  
道教の思想からきたものであるとい  
う複雑な信仰形態であるからであろ  
う。

まず「庚申(こうしん・かのえさる)」  
ついて説明をしておかねばならない  
が、「甲乙丙丁戊己庚辛壬癸」の十  
干と、「子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥」  
の十二支を組み合わせた六十通りの  
干支(かんし・えと)の、最初の甲子  
(こうし・きのえね)から数えて庚申  
(こうしん・かのえさる)は五十七番  
目にあたる。

昔行なわれていた庚申待は、現在  
の戸杓のように年一回の庚申の日だ  
けではなく、庚申講という仲間をつ  
くり、六十日に一回廻ってくる庚申  
(かのえさる)の日毎に夜明かしをす  
るのである。

初めは身を慎むことから始まった  
ようであるが、次第に皆で飲食、歓  
談をして過ごすようになってきたと  
いう。三夜待と同じである。そこで  
様々な情報の交換をしたり、農作業



などの知識や技術の研究も行われたかもしれない。



なぜそのような風習があるのか。

それは中国の道教の思想から来たものと言われているが、人間の体の上・中・下それぞれの部位に上戸（じょうし）、中戸（ちゅうし）、下戸（げし）と呼ばれる三匹の尸虫（しちゅう）、すなわち三尸（さんし）の虫がいて、それが六十日に一回廻ってくる庚申の夜に、その人が寝ている間に体内を抜け出して天に昇り、その人間の犯した悪業を天帝に告げに行くのである。

その悪業の程度によりその人間の寿命が短くなる、つまり人間の寿命を左右するのである。人間誰しも過ちを犯さず毎日を暮している人はほぼおるまい。そこで三尸の虫が己の体内から出て自分の悪業を天帝に告げ口をされないよう夜通し起きていようというわけである。

この庚申信仰の三尸説は、わが国には中国から奈良時代には伝わって

きたようであり、平安時代になると貴族の間で庚申の夜を過ごす際に詩歌管弦の遊びを催し、酒なども振る舞われる「庚申御遊（こうしんぎょゆう）」という宴がなされ、遊興的な要素が強くなった。その後鎌倉時代から室町時代になるとこの風習は武士階級へと広がっていき、この風習を庚申待と称された。

この庚申待はやがて一般庶民へと広がっていったが、以前の宮廷貴族のそれとは異なり札押対象となる神仏が登場してくる。江戸時代になると神道系では猿田彦神、仏教系では青面金剛（しょうめんこんごう）を祀るようになっていく。そこで行われる庚申待は、神や仏をお祀りすることで、禍から逃れ、現世利益を得ようとするものであった。

すなわち健康長寿であり、厄除け、病除け、家内安全、五穀豊穰等である。その庚申待とともにする仲間を



陶山神社・庚申塔

庚申講といい、入浴をするなどして身を清め、猿田彦神や青面金剛などの像を描いた掛け軸を掛け、真言や経を唱えるといったお勤めを行い、飲食を共にして四方山の話をして夜を過ごし、鶏が鳴くのを聞いて祀りを終えて寝に入ったともいう。古くから鶏が鳴くと夜の間に跳梁していた悪霊、邪鬼共が退散するといわれ、すべての禍は去っていくといわれていた。

ただ近年になってからは、勤行はせずただ集まって飲食をし、雑談をしながら夜の明けるのを待つ、そして徹夜はせず夜半でお開きになるようになったともいう。

庚申の日は六十日に一回であるから一年に六回、そして三年で計十八回続けたら祈願成就の記念として、庚申塔、庚申塚を建てた。陶山神社には「天保三年 壬辰八月」の庚申塔があり、椎谷神社には「大正九年



椎谷神社・庚申尊



黒牟田・日峯社 庚申塔(青面金剛)

庚申六月一日」の庚申塔がある。椎谷神社の庚申塔は「庚申尊」と彫られてあり、台座には当時の庚申講の世話人、仲間の名前が刻まれている。そこには椎谷神社がある外尾村地区ばかりではなく、外尾山、大野、黒牟田の地区名と人の名前も見える。それは有田町内で私が見た限りの狭い中ではあるが、年代が確認できる最も新しいものであり、庚申待は全国的にもほぼ大正期で終わりを遂げたようである。

外尾町・椎谷神社の庚申尊の碑は、祈願成就の年が六十年に一度の庚申の年である大正九年。六十日に一度の庚申の日の集まりの成就の年がこれまた庚申の年、台座には世話人の名も刻されているが、これは世話人





応法・天照皇大神宮 庚申塔(青面金剛)

さんたちが意図したものであろうか？

では、最初に戻るが、なぜ戸杓は猿田彦大神なのであろうか。猿田彦(サルタヒコ)は古事記、日本書紀に登場する古代の神であるが、ニニギノミコトの天孫降臨の際に「吾(われ)先だちて啓(みちひら)き行かむ」、つまり道案内をしたとされ、道祖神、塞(さい)の神と同一視されてきた。他の地から災い、疫病が入ってこぬようとの意味から、ほぼ戸杓の入り口付近に建てられたのであろう。

また今は台座の部分がコンクリートで固めてあり見ることができないが、そこに自分の父祖の名前が刻まれていると言われる近所の方もおられる。それは猿田彦大神としての碑

の建立に関係したお名前であったか、庚申塔すなわち庚申講の一員としてのお名前であったかは定かではない。そして猿田彦神が庚申信仰の祭神とされるのは、「庚申(かのえさる)」の申(さる)＝猿との言葉の結びつきから、猿の字を冠する神が猿田彦と解されたり、庚申信仰は比叡山日吉大社の山王信仰と密接に関係があり、山王信仰は猿に象徴され、そこから三猿(見ざる聞かざる言わざる)や猿田彦へとつながったともされる。

また猿田彦が道祖神であるという説は古代神話からの俗説として古くからあった。猿田彦は様々な顔を持ち、岐(く)など・ふなど神、つまり枝道、分かれ道の神であり、戸杓も枝道の処に猿田彦大神の石碑は建っている。また猿田彦は土公神(どくじん・どこうじん)で土の神ともされ、また田の神ともされた。であるから猿田彦を祭神とする庚申待も豊作を祈願するものでもあったと思われる。

かように猿田彦祭は庚申信仰と相俟(あいま)って、健康長寿、無病息災、疫病除け、五穀豊穰、塞(さい)の神＝幸(さい)の神、土地の神への祈り、感謝等諸々の意味合いをもって今に続いていると思われる。

## 外尾山八幡神社創建について

大串 和夫

我がふるさと外尾山地区の数々の石造物等調査の結果を報告してきたが、残りの八幡神社・大師堂・忠霊塔について調査が完了し、外尾山に係る神社及び石造物等すべての詳細調査報告書が出来上がった。

まず、八幡神社は三郎山という地域を見下す小高い山の頂上にある。区民の安全と繁栄を守る守護神である。なお、御神体は十五代「応神天皇」である。創建年は不明ではあるが、元治元年(一八六四年)に再建



外尾山地区の八幡神社

されたようである。

当初の拝殿は二五〇年前(寛保年間)に建造されたようである。文献がないため、付近の石造物の築造年月日などを参考にしている。

また、現在八幡神社及び隣接する大師堂は雨漏りなど老朽化が激しく、平成三年に新築されたもので、その際、棟基盤天井絵などが整理され記録板が発見された。当時、庄屋大串覺左衛門・大世話人大串郡右衛門(大地主)、施主に、大串覺左衛門・生田重平・藤本覚助・大串特次郎・藤本栄左衛門等記載があった。

また、鳥居は『八幡宮』寛政四年二月建立 山中昌之作とあり、先の大串覺左衛門・大串郡右衛門の名が刻んである。

次に大師堂については、弘法大師(二像 高さ四〇〇四五センチ)・聖観音菩薩(高さ六五センチ)・弁財天(高さ六八センチ)・薬師如来(本尊 高さ九五センチ)が安置されている。

最後になったが、今年は『戦後八十年』の節目の年で、地区内には先の数々の戦争で戦死された地区出身の方が祀っており、忠霊塔の記録を記載したい。



今回記録に当たっては個人情報のこともあるが、敢て慰霊のため記録として保存することにした。この土地は「高麗社」があったところで、祭神は東明聖（高句麗初代とされる王）、社殿は石祠で三坪、信者は十三人となっている。現在は跡形もない。

### 【戦没者氏名・年齢・親族】

福島正行 二八 父為次

美代次二六 父為次

太吉 二〇 母いわ

梶原農夫男二三 兄佐賀男

藤本榮治 三一 兄忠次

濱田力男 三五 妻かをる

池田清作 五三 妻コト

藤本治静 二二 母キヨ

藤本豊吉 二三 弟鉄男

吉浦 清 二七 母かる

土本 巖 二六 母すが

池田衛一 二八 妻つも

藤本金光 二五 母きみ

梶原玉夫 四一 妻静恵

藤本逸郎 三六 妻みつ

森 秀雄 三五 兄貞雄

大串 定 二七 母すゑ

佐々木昭 一六 母はし

富永 清 二三 父清四郎

田中末六 三九 妻ふゆの

大串弥平次二五 母きよ

大串雄市 二五 叔母いと

桑原敏雄 二〇 父三次

最後に故人のご冥福をお祈り申し上げます

外尾山地区戦死者 二十三名 以上

### 【参考文献等】

佐賀 黒髪へんろ道 初版令和四年

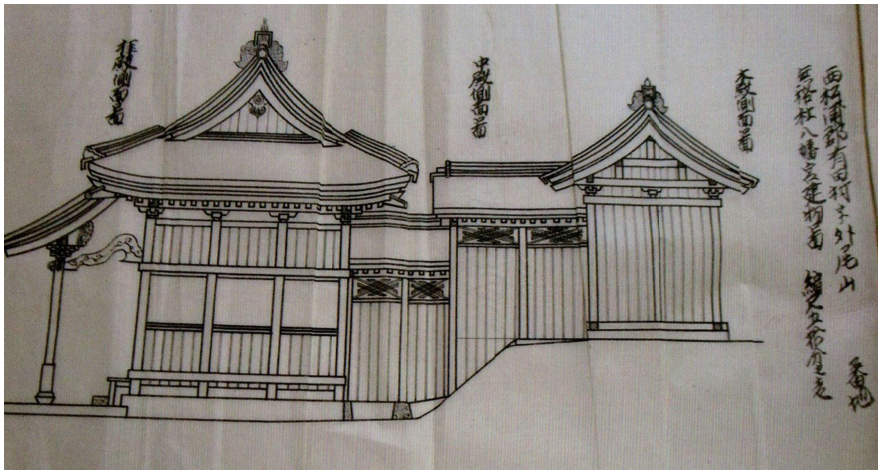
有田いろいろ温故知新 有田郷土史

研究会 平成五年十一月発刊

明治二七年 社寺に関する書類

明治・不動産登録申請書控、八幡宮

（外尾山古文書）



八幡神社の立面図（明治時代）

## 有田の源流、唐津焼

鶴 美百合

先月6月は、有田史談会のメンバーで佐賀県唐津市の名護屋城本丸跡地で散策と博物館を訪れる事ができました。

有田から名護屋城をめざし、車を走り続けること90分、博物館のちよつと手前で、呼子ン（の）朝市に立ち寄ることに。有田ん山ン中から出て来た私は、車窓から見える玄界灘、港に停泊している漁船、イカ干し、磯の匂いでもう癒されました。いかったー！！



呼子港に停泊している漁船

さて、今回は、有田史談会スペシャルで名護屋城博物館・家田淳一館長に説明をして頂きました。ラッキー！その、ご説明の中、「ええええっ！」とまさにひっくりかえる直前でした！私にとっては、思いもよらぬ、しかし、心の中で、ハレルヤ！やった！！と叫び、喜びの歌をうたいました。

それは、一体なにか？それは、展示してある、出土品でした。家田館長が、さらりと「これは前田利家陣屋跡から出土した唐津焼です」と、いや、信じがたい、ですので、もう一度と、聞き返したくらいです。

その出土した、目の前の唐津焼はこげ茶色で、高台の底の丸い部分だけで、側面がほとんど欠けていました。どえりやく破壊されたのでしょうか？絵柄、釉薬など全然わからなかったです。

と、ふと、史談会のメンバーを見渡すと「・・・」エーっ、無言？かい？しかし、私は大満足、ダイヤモンドくらい貴重な情報と唐津焼でした。

さて、そこで、私はなぜ、こんなに喜んでいるのでしょうか？それは、私は前田利家の大・大のファン。そして、利家について一番知りたかつ

たのをA Iへ、「前田利家はキリシタンに対して好意的ですか？」と尋ねてみました。

A Iはこれに対して、「好意的でした。特に高山右近の影響を受け、キリスト教文化や宣教師の知識を高く評価していました」と、嬉しいじゃありませんか、A Iさんも答えが好意的で安心しましたよ。

さらに、Question： 前田利家とその息子利長が、高山右近と友人のキリシタン内藤ジョアンのファミリを26年間も庇護したのは何故ですか？ Answer： 右近の軍略・築城の才能と、キリスト教信仰を貫く姿勢に魅せられたからです。そして、加賀藩を支えながら、信仰と茶の湯を育んだのです。

また、しつこく、Question： 前田利家と利休七哲との関係は？と聞いたところ、

Answer： 主に利休七哲の一人である、古田織部を通じて見られます。

さて、そこで、七哲とはなんでしょう？ それでは、千利休の弟子のお名前を。

蒲生氏郷・細川忠興・古田織部・牧村利貞・高山右近・芝山宗綱・瀬田正忠

そうそうたる、戦国大名スターメン

バーです、そして、「茶の湯」メンバーでした。私は、以上の弟子たちはキリシタンに友好的な茶人と思っています。千利休の2番目の奥さんと娘はキリシタンでしたと三浦綾子の小説『千利休とその妻たち』にもあります。

「戦国大名」「茶の湯」「キリシタン」そして「唐津焼」が加わったキーワード、私のお話し、もう少しだけ聞いてください。（簡潔にと、気を付けます）

さて、このような、キリシタン友好メンバーのバック・グラウンドを持つ、前田利家陣屋跡での唐津焼の発掘、しかし、公に明かされていなかったものにキリシタンの影があるように思われます。

そこで、唐津焼でその影がありそうな窯跡を紹介したいと思います。

まずは唐津焼・唐津、ご存じの方もいらつしやるでしょう、大正末期から昭和初期とのこと、日本全国、多くの研究者が山を登り、谷を下って汗を流しながら、古窯跡を自ら発掘して真偽を問うていたのであります。それは、唐津焼はいつ生まれたのか？

A 文禄・慶長の役の前 (Before)

B 文禄・慶長の役後 (After)

あなたはどちら？ いまだに諸説ありだそうです。

さて、唐津焼研究者の中には、あつと驚く為五郎！（兄の受け入り）なんと、中島浩気さんもいらつしやいます。あの「肥前陶磁史考」の著者です。では、中島浩気さんの唐津焼の調査の一例を？を紹介します。

「一若古窯」 「古く埋めし石碑の残映があり、これがすなわちオランダ墓あり、ルソン系統のものを焼いていた」と。（注：江戸時代、地元の人達はヨーロッパ人をオランダ人と呼んだが、カトリック系のポルトガル人及びイタリア人かと思われます）。

そして、一若古窯跡は、唐津焼のルーツの一つと考えられています。その理由に、自由闊達な絵唐津があり、隣接した甕屋の谷の織部風のたき水差しの底にローマ字の「L」や反転した「L」を窯印のように使っていると中里太郎衛門さんが指摘されています。神谷（甕屋の谷）窯（伊万里市大川町河原所在する窯 構造；割竹式登り窯か？との指摘の通り、有田の小溝窯との関わりのある窯だと思われます。

それでは、有田で閉鎖された唐津

窯跡で影のある窯を紹介いたします。年代は、明らかです。一六三七年以前の窯跡です。

小森谷窯（広瀬）；白色系と緑色系に分かれ、白色系には、口縁部に鉄釉を塗った皮クジラ手や絵唐津がある。

小溝窯ですが、磁器ですが、ハートそして、最近出版された本では、新たに、木瓜形に十字文の皿が、小溝のトレードマークのように多く描かれていたとわかりました。



木瓜形に十字の文 小溝窯跡？

そして、南蛮屏風にでくるような松の下に今まで、中国人が描かれているとばかり思っていた黒い服を着たのっぽの人物は、実は、「宣教師」が描かれている大鉢とわかりました。このことから、小溝窯は異文化を取り入れた先取り窯だった





古物成で出土した唐津焼

ようです。  
そして、小溝の「唐津焼」では、絵唐津皿は簡単な文様が多い中に、四方方向付などにみられる皿縁に木賊（トクサ）文を描き、うちに草文を描くといった文様は、神谷（甕屋の谷）窯（伊万里市大川町河原に所在する窯）構造は竹割り式登り窯と思われる、有田の小溝窯跡からも類似したやきものが出土している点で、有田の小溝と関わりがある窯だと考えられています」

天神森窯；大規模な窯場で小溝窯と並んで有田初期の中核的窯。陶器と磁器を併焼。磁器成立後は上質な磁器を生産した。灰釉、透明釉、鉄絵を施したものが主体。片口、鉢、碗、鉢、小杯、すり鉢、壺、甕、瓶、と火入れなどがある。

小物成窯；もう、ズバリ！鉄絵で十字を描いた文様を描いています。しかしながら、有田では、認知度ゼロのようです。

高木大輔氏によると、「この碗の陶片は小物成での表面採集資料出土で、碗の側面部には、鉄絵で丸十字を描いた文様が確認できた」と。

そして、「絵唐津丸十字文茶碗」は出光佐三が鍾愛して、出光美術館の古唐津コレクションはこの一鉢と佐三の出会いから始まったというインパクト、アリアリの茶碗の陶片が出土したとは嬉しい限りです。（出光美術館の陶片研究要記を参照）

さて、私が考える、唐津焼の起源は、極端ですが、イエズス会のフランシスコ・ザビエルが日本に上陸してから、唐津焼の下地が出来上がっていたと考えます。ちよつと、それは、早すぎでしょ！と思われるでしょう。しかし、ザビエルの後、日本人べた褒めのオルガンチーノが来て、やりての巡察師バリニャーノが来日し、織田信長と「ノブ」「バリ」と呼び合った、心からの友だったのに違いありません！

バリニャーノは、1579～1580年を口之津で過ごし考えた。はて、なにを？ 宣教方針をです。その考えた



小物成出土の片口コピー作品(自作)

一つが日野江城下のセミナーオを建設し、その中に「茶室」を設けよう！なんと、バリニャーノ来日から9カ月後という速さで決断したのが「茶室」。そして、すべての教会に「茶室」が設けられたのでした。

「茶室」布教の成功のカギは、バリニャーノが事細かすぎるくらいに茶の湯の指南書のように、書き留めたテキスト・ブックでした。茶道具など、すなわち、日本語をローマ字で書いて道具の使用法を説明するなど、徹底していました（現在、当時の呼び方が解り重宝しているのだそうです）。まるで、辞書のような道具目録を作っていました。

また、「茶の湯規則」を守らせ、例えば、主要な修道院には必ず一名の茶の湯に習熟している者を常駐さ

せることを規則としたなど徹底ぶりでした。

それが功をさし、ころがりおちるように、キリシタン大名が続々と歯止めが利かないように生まれ、茶の湯ムーブメントが起きたのであります。

そこで使われるのが「茶碗」。今回、前田陣屋跡地で「茶碗」が見つかったのは、文禄慶長の役の前線地陣屋跡、名護屋です。領主は波多氏、波多親がキリシタンとは断定する資料はないのですが、波多氏の領地が宣教師の活動範囲に含まれていた。また、キリシタン大名の有馬晴信と兄弟だという説あり（親を有馬義貞を父とする場合驚きですね）。

そうそう、それを、証明できるのが、もう、26年前の「肥前キリシタン研究」誌で見つけた、内山一正氏のタイトルです。「肥前名護屋には440年前、キリシタンがいた、ポルトガル船も来航」と。数ページあるのですが、少しだけ抜粋します。

1582年（永禄）十月二十日夜半、イエズス会修道士 ルイス・デ・アルメイダは、「キリシタンが多数いた（姪浜、福岡市）から平戸行き船便で、「肥前国（佐賀県）名護屋に



お粗末ながら私自作の唐津焼

一泊二日間立ち寄った。ここには数人の地元キリシタンがいる、日本でデウスの事を最もよく知っている「信ず」という高い評価を記録しています。(記録はアルメイダ書簡) 名護屋が県内最初の地元キリシタンとは、いやはや、もう、Happy❤️！

さて、有田でのキリシタンはどうだったのか？ 札ノ辻(メイン・ストリート)の交差点)には、江戸時代、幕府のお触れがあり、最初に書いてあるのが「キリシタン禁制」で始まっていて、それは、それは厳しく取り締まっていたと、ガイド時代に学んだことがあります。

何故、「キリシタン禁制」を持ち出したかといえば、今回、名護屋城陣屋跡を破壊した理由が、徳川幕府が、再び起きるかもしれない「島原の乱」を恐れて徹底的に壊したとの説明を受けたからです。

有田でも、同時期、寛永4年(1637)「島原の乱」7ヵ月前に、唐津焼陶器を焼いている窯場をすべて閉鎖して、日本人陶工826人も男女を有田から追放しています。

そして、その年、徳川幕府は鎖国に踏み切りました。

有田での、陶工男女、826人の追放は、まさに、有田がノリノリだった時期ではないでしょうか？ 唐津焼と磁器を併用して優品を焼成してた小溝・天神山などの窯があったのですから。

「古伊万里探求」著書の野田敏夫先生によると、有田の1637年は、キリシタン陶工集団を追放したと推察されています。だとすれば、826人の命が助かったので、捕らわれて牢に入らなくてよかったですね。

ということとは、すなわち、唐津焼の窯を閉鎖した窯跡から出土する唐津焼はすべて、1637年までと年代が特

定できます。

最後に、京都市姥柳町遺跡(南蛮寺)出土した唐津焼をどうぞ。

ここの遺跡にあった南蛮寺は織田信長の保護のもと、天正4年(1576)8月15日ミサを献げた三階建ての教会だったが、天正15年(1587)豊臣秀吉の禁教令により翌16年に破壊された。この遺跡から唐津焼の陶片が出土していることは唐津古窯の上限を知るうえで極めて貴重である。(文献)1973年同志社大学文学部考古学調査記録第2号とあり、この南蛮寺「バリ」(バリニャーノ)の提案での「茶室」が設けられていて、そこから、出土したんではないかなあと私は思っています。

文禄・慶長の役に駆り出された名のある大名達のほとんどは九州のキリシタン大名達でした。茶の湯を愛する武将もキリシタンが多くいました。「唐津焼」が出土しているところもそうです。

今回は、前田利家陣屋跡から出土した「唐津焼」をキーワードに探していくうちに、「茶の湯」と「キリシタン」につながっていきました。

終わりに、中村さん、いつも、史

談会会報の編集長をしてくださるお陰で、「急いで原稿を渡さない」と！」と思ひ、同時に、勉強するチャンスが与えられとても感謝しています。家田館長には、博物館内と本丸跡地散策まで丁寧によりやすく説明して頂きお礼申し上げます。史談会の皆さんとの散策本当に楽しかったです。

では、ごきげんよう！ チャオ！

## 第二回パリ万博

山口 信行

西光寺(有田)



有田町上幸平の西光寺近くを通ると、ガイドをしている最中に話が及ぶのは、いつも最幕末の1867年、第二回パリ万国博への有田焼出品の話に触れることである。出品のための



品定めやその準備が、そこで慌たしくなされたであろうその情景が浮かんでくる。佐賀藩のパリ万博団の団長を務めた佐野常民もその指揮をとった。

フランスからパリ万博への参加を求められた幕府は、各藩への参加を求めたが、佐賀藩と薩摩藩と江戸の商人だけが名乗り出て、それに幕府が加わることとなった。そして、それぞれの藩が独自でチャーターした外国船にてパリへと向かうわけである。

時はまさに幕末の混乱期。参加意図はそれぞれに思わくがあったようだ。力が弱まっている幕府としては、一隅のチャンス、ここで各藩を束ねて統治者としての権威を内外に示したかったに違いない。が、参加数は少なく、出鼻をくじかれた。それでも、將軍慶喜の弟、徳川昭武を將軍の名代としておもてに出し日本国の統括者としてデヴィューを画したのだった。対極にあったのは薩摩藩である。その二年程前より、薩摩藩の五代友厚を通してそのメイン会場の調査をし、云わば幕府と独立し対等の立場でのブースを画策し、当初は琉球王国使節（後、薩摩大守政府）として参加するという、幕府が唯一の日本の統治者との立場を無視する行動に出ていた。日本の討幕の運動と連動

したわけである。

一方、佐賀藩は自藩の特産品をいかにアピールするかに賭けていた。陶磁器、白蠟、紙、麻等であり、さらには、佐野常民自身が藩主から蒸気の軍艦である、「日進丸」の発注の特命も担っていて、そこには他藩に先駆けた近代化の意図が読み取れる。要するに、佐賀藩を含めたこれらの藩等が、日本初の万博への参加を果たしたのである。

### パリ万博、佐賀藩使節



ところがあるのである。ここからが本題である。今から数年前、大河ドラマに『青天を衝け』というのがあった。「日本資本主義の父」といわれるこ

存知、渋沢栄一を主人公にしたドラマで、放映当時、次期一円札の顔として決定していて注目されていた。ドラマのなかで、彼は幕府側の人物としてその第二回パリ万博へ渡航する。我ら佐賀の人間は当然期待は高まった。パリに渡った佐賀の人物は、博覧会会場での有田の焼物などは、いかに展示され、描かれるだろうか。

ところが、期待は完全に裏切られた。佐賀藩の「さ」の字もドラマでは出てこなかった。会場内展示ブースには、幕府、薩摩藩、それぞれに、「日本大君政府」「薩摩大守政府」に対し、史実として、日章旗の下に杏葉紋のデザインで「肥前大守政府」と書かれた飾付がなされていたはずののである。確かに、佐賀藩がこのドラマの本筋に直接的な関わりはないかもしれない。でもそれはないだろう！、と感じたのは、私だけではない。これに違いないと思った。これは、江戸期に日本初の万国博覧会へ出品したのは、幕府と薩摩藩だけとの誤解を与え兼ねないではないかと危惧した。念のため、この作品の小説版を見てみたが、一切の記述はない。ドラマ放映後、その点での事後感想が表だってあったかどうかは定かではないが、ガイド内では当時一部共有していたものだった。

「歴史考証」の点からも、佐賀藩の人物をちよっとだけでも出し、誤解を生じさせぬようすべきではなかったかと残念でならない。ドラマは通常一回で終わるが、映像はずっと残っていく。

この場面での中心は、パリの地で巻き返しを望んだ幕府が、それを彼の地でも薩摩藩に阻まれ、時代は既に大きな流れで瓦解していることになったのなら、他方、佐賀藩のように、藩の今の物を世界に問い、蒸気機関を含め、まだ見ぬものを世界に求めていくその姿勢こそ、その動機の面でもより純粹に見えてくる。現に佐賀藩では明治以降、日本国として、ウィーン、フィラデルフィア万博等へと人を送り出し続けたのである。何年か前のキャッチコピーではないが、「その時、日本は佐賀を見ていた。佐賀は世界を見ていた。」のである。



第2回パリ万国博覧会会場全景

## アニョハセヨ！

## 釜山旅行顛末記

中村 貞光

陶器市明けから計画してきた釜山旅行。5月中旬まずフェリーを予約し、釜山でのホテルはアクセスの良い釜山駅前の東横インに予約しました。釜山は10年前に西山峰次氏と2人で訪れているので懐かしくもあり、一度行っているのに安心感の方が大きいのですが、旅行に慣れない老人だけの海外旅行？ともなると、安心と安全を重視した旅行を選ぶ方が重要なのだと自分に言い聞かせているものの、本当は不安を隠しているのです。(笑)

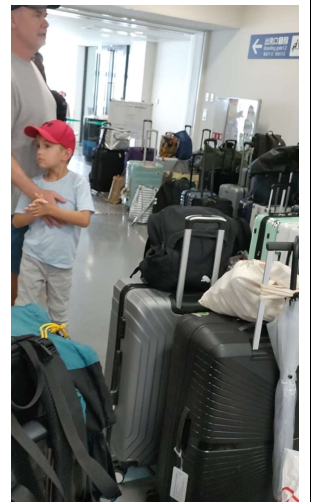


韓国とはいえ、海外旅行となると会話の心配があり、片ことはおろか全く韓国語が話せない老人2人が、添乗員のいるツアーでなくホントに大丈夫？と思いつながら、「アニョハセヨ」と「コマスマダ」だけで、あとは身振り手振りと老人力でカバーすれば良いのだと、思い切つて予約をしたのでした。

釜山までは博多から約200km、近くても外国なのでパスポートを早めに用意？もう子供の遠足並みのはしやぎようです。

予約をしてからは天候が毎日気になり、天気予報とにらめつこの毎日でした。梅雨入りした後なので多少の雨は仕方ないと諦めながらもやはり気になる現地のお天気でしたが、一週間ほど前から好天に転じ、晴れ男と晴れ女の実力が証明されて顔を見合わせながらニンマリ！旅行の準備は1週間前から徐々に始めるなど用意周到！パソコンで現地情報を収集しながら過ごしました。

6月16日、午前4時に起床！老人は何事も早めに行動するに限る！と予定を30分早めて西九州自動車道で博多へ向かいました。都市高速から釜山に向かう「ニューかめりあ」が見えてきました。



博多港国際ターミナルに車を留め、カメラアラインのチェックインカウンターで手続きを済ませると、出国手続きまで約1時間の待ち時間です。周りを見渡すと韓国人客が殆どで、定刻になり出国の手続きが始まるといよいよ韓国へ渡るのだと実感が湧いてきました。

パスポートとチケットを準備し列に並ぶと、いよいよ日本を離れる時刻が迫っています。出国の手続きが終り乗船の時刻まで待合室で待機しました。アナウンスがあり乗船が開始されると、タラップを渡り船内へ。船内で上の階を指示され予約した2等船室に辿り着きました。船室には3人の家族連れを含めた3組が入り総勢9人の賑やかな部屋になりました。

荷物を下ろし居場所を整えるとともに船内の確認と見学です。最初にデッキへの通路やトイレを確認し、各フロアーの状況を見て回りました。船

の中央には各デッキへの螺旋階段が設けられていて、一番下の階の中央にはエントランスインフォメーションがあり、すぐ横に食堂があり隣に自販機が並んでいました。自販機コーナーを覗いて見ると、ビールが格安で販売されていました。

フェリーの「ニューかめりあ」は、全長170m、巾24m、総トン数19961トンで博多港と釜山港を結ぶ国際定期航路として就航しています。ちなみに博多を昼の12時半



釜山⇄博多間に就航しているニューかめりあ





エントランスの出口付近は沢山のキャリーケースで埋まっています、我先にと下船を急ぐ客の荷物がひしめき合っています。アナウンスがあり下船口の扉が開くと一斉に客とキャ

天候は上々波も穏やかで玄界灘を進みます。速度はいたってゆっくり約23ノット(約43キロメートル)で走行していて、波を切り開いて進むエンジン音だけが響いています。時折、船の前方にある展望室と客室を行ったり来たりして時間を潰しましたが、夕方6時頃には釜山港が見えてきて船内は下船の準備で慌ただしくなりました。

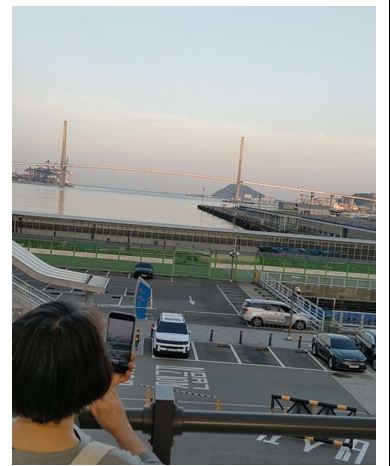
に出港し釜山に夕方18時半に入港、帰路の釜山からは20時に出航し、博多には翌朝8時に入港します。つい最近まで就航していた高速船ビートルに比べ倍以上の時間がかかります。定刻通り船は博多港を離れ、釜山への旅が始まりました。

リーケースが出入り口に吸い込まれて行きました。タラップを渡り釜山港での入国審査が始まると、韓国人は簡単な検査で足早に出口に進み、外国人である私たちは検査に時間がかかり、入国の審査に30分以上もかかりました。

入国後は、今日の宿泊予定の東横イン釜山駅のホテルまで行かねばなりません。10年前の記憶を頼りにターミナルビルを出ると、肝心のホテルは見えません。スマホがインターネットに繋がらず、ホテルまでの道順がわかりません。

とにかく勘を頼りに歩き、通りかかった女性に家内が堂々と日本語で話しかけ(笑) 不思議と会話が通じ「こっちの方向!」と私たちを釜山駅まで連れて行ってくれました。感謝感激で私は「カムサハムニダ」を連発したのは言うまでもありません。後で確認すると約1500円以上も歩いて移動していました。

東横インホテルに到着しチェックインの手続きを始めると、ホテルの会員カードを忘れていたのに気が付きました! ホテルの両替機で2万円を韓国ウォンに替え、代金を支払ってようやく部屋へ入ることが出来ました。しばらく部屋でくつろいだあ



釜山港大橋を望む

とホテル前の釜山駅に向かい、駅ビルの内のクッパの店に入りました。豚肉の入ったデジクッパと別のクッパをオーダーして初日の釜山での夕食でしたが、ホテルに戻ったとたん家内のお腹の具合が悪くなり、腹痛と下痢の後に手のしびれまで発症し、観光どころか病院に行くことにもなりかねない状態でした。

翌朝は6時に起床! 家内は腹痛も収まり、朝食はホテルでのバイキングを消化の良いものを選んで少しだけで済ませました。初日は家内の体調を考え近場で過ごすことにし、まずは滞在中に使用するお金を両替しなければならず、交換レートの良い西面(ソミョン)まで出掛けました。

西面は釜山駅から地下鉄で6つ目の駅です。地下鉄はほぼ駅員がいないので、切符は自販機で購入しなければならず、韓国語なので間違えて

改札を通ってしまい、一旦改札を出て目的の方向の改札に入ろうとしたら今度はブザーが鳴り響き、改札が閉って通れなくなってしまう汗まみれになり慌てました。

どうにか西面に着くとエスカレーターと階段で地上に出ました。周囲を見渡すと釜山ときほど変わらない感じで、駅から2分ほどの場所に両替所があるはずです。早速、事前の情報で探して見るのですが、さっぱり分からず随分探し回りました。目に入った薬局に飛び込み「アニョハセヨ!」と笑顔で声をかけ、持参のプリントを見せやと辿り着きました。5万円を渡し韓国ウォンに交換してもらった468,500ウォンになりました。何だか金持ちになったような気がしました(笑)





路地から街なかに出て散策を続けるとビルの谷間にLOTTEの文字が見えてきました。韓国にはLOTTEデパートが30店舗ほどあるようです。西面は釜山本店、9時半頃に入ったので開店前でしたが、最上階の飲食店と映画館が入っているフロアに上がると、広く清潔な印象を受けました。

西面の散策を終え、地下鉄で南圃駅まで移動しチャガルチ市場周辺を見て回りました。チャガルチ市場は韓国最大級の海産市場で、チャガルチ市場ビル周辺には数多くの露店や問屋街が並び観光地となっています。

早速、西面近くの街なかを散策をしてみることにして、地下鉄の駅周辺を約1時間ほど歩き回りました。路地に入ると迷路みたいな場所に数多くの簡易食堂？が軒並みに並んでいて、地元の人たちが利用しているにしてもあまりにも多くの店の数に圧倒されました。



10年前の記憶を辿りながら家内をエスコートしました。地下鉄の出口を出てすぐに海産物を扱う店が見えてきます。店には海苔や昆布、いりこ等が山積みになってスルメも吊るされていて、同じような店が軒並みに並んでいます。

チャガルチ市場はビルの中にあります。多くの出店には水槽が並び、魚やアワビ、カニ、うなぎなど元気に泳ぎ回っていて、ここでは新鮮な魚をその場で捌いて食べさせてくれるのです。店の人たちは私たちを見つけると盛んにアタックをしてくる

ので、「見るだけ！見るだけ！」と苦笑いで応じながら市場の中を見物して歩き回りました。

歩き疲れて、帰りはタクシーでホテルへ。しばらく休憩し釜山駅の向かい側で昼食のお店を探し歩き回ること1時間。ひと廻りして駅前の小さな店で石焼ビビンバと沸騰したカルビスープで腹ごしらえ。昼食後は南圃洞を再度訪れ、高麗人参が目にとまり購入しました。この春Amazonで300g入りを9800円ほどで購入しましたが、釜山では半額以下の4000ウォンでGETできました。初日の釜山観光では約2万歩ほど歩き回り疲れ果て、LOTTEでお寿司とビールを購入しタクシーでホテルへ戻りました。8時頃に入浴を済ませ簡単な食事を終えると一日目が終わりバタンキューでした。

翌朝は6時半に起床！7時過ぎにホテルでのバイキングの朝食。前日とメニューが変わっていました。朝食が終ると家内の元気が戻り、計画通り通度寺の見物に出かけることにしました。ホテルでの2日目は10時までにホテルをチェックアウトしなければならず、ひと先ずホテルに荷物を預け2日目の観光に出掛けました。

地下鉄1号線で釜山駅から約40分ほどで終点の老圃駅に到着です。1号線は地上区間を多く走るので、釜山旅行を初めて楽しむ家内に車窓からの様子を語りながら老圃に向かいました。車窓から幾つもの団地のビル群が立ち並び、次々に目に飛び込んできます。建物が密集して立ち並ぶ様は、釜山周辺が起伏に富んでいて人口がとて多いのが容易に想像できます。韓国が想像以上に発展を遂げていて「有田とは違い過ぎる大都会じゃー！」驚きの連続でした。

終点の老圃（ノポ）には地方に向けた路線がいくつもある大きなバスターミナルがあり、ここから通度寺に直行バスで向かいます。チケットを購入し、バスターミナルを出発するとすぐに高速道路に入り、超スピードでどんどん車を追い越し、運ちゃんの荒い運転であつという間に通度寺バスターミナルに到着しました。ハラハラドキドキ緊張の30分間で車窓からの風景を楽しむ余裕はありませんでした（笑）

通度寺は霊鷲山の南麓にあり、新羅の僧である慈蔵が唐で仏法修行して帰国した後、646年に善徳女王の命令により創建されたと伝えられています。2018年にユネスコ世





通度寺入口の大きな山門を見ながら脇を通り参道に入ると、大きな松が生い茂る参道が続きます。最初の大きな建物の博物館に辿り着くまで約30分ほど汗だくになりながら歩きました。山門から境内までは長い道のりなので長椅子が幾つも設置されていました。参道2人が両手で抱えてやっと手が届くほどの巨大さで、樹齢長さを感じました。この日の天気は晴れで気温が高く汗をかきなが

界遺産に登録されていて、韓国仏教の最大宗派である曹溪宗のお寺です。バスターミナルからは通度寺入口の山門までは約700mほどを色々な店のハングル文字を見ながら歩きました。飲食店やセブンイレブンもありました。

らの散策になりましたが、「霊験あらたか」という言葉がピッタリな雰囲気漂っていて、参道には素足で歩く人が何人もおられました。素足で歩くことで通度寺の霊気を身体に取り込んでいいるのでしょうか。とても気持ち良さそうに歩いていました。博物館に入ってみると仏様の掛軸が正面に飾られていて、縦が約15m、巾は約3mもある大きな掛軸に目を奪われました。1767年代の貴重な仏教絵画とのこと。

博物館を通り「霊鷲山通度寺」の額のある一柱門（中心の柱が一直線上に並んでいる）をくぐり境内に入りました。高麗時代の1305年に作られた立派な門です。

境内の伽藍配置は金剛戒壇を頂点として下炉殿・中炉殿・上炉殿の三つの領域で構成されています。

途中の天王門には大きな木製の四天王像が奉安されていて、梵鐘樓には巨大な梵鐘が吊るされ、二階にも大きな太鼓が安置されていて歴史の重みに圧倒されました。

境内の一番奥まで進むと壮大な大雄殿がありました。「16世紀末の文祿・慶長の役で焼失し、1645年（仁祖23年）に友雲という僧によって再建され現在の姿となった。正面



の南側には金剛戒壇、東側には大雄殿、西側には大方廣殿、北側には寂滅寶宮と、それぞれ異なった扁額が掲げられている。金剛戒壇仏舍利塔に釈迦の身骨である舍利を奉安していることから大雄殿の中には仏像を奉安せず代わりに精巧で華麗な仏壇を造成して莊嚴にしている。」と解説されています。大雄殿の後方には通度寺の中心となっている金剛戒壇

仏舍利塔があり、慈蔵律師が唐から持ち帰った釈迦の頂骨舍利が奉安されていて国宝に指定されています。いずれの伽藍も古く莊嚴で長い年月の重みを感じながら通度寺を後にしました。

通度寺の散策を終え山門近くで冷麺とマンドゥ（餃子）の昼食を摂ったあと、釜山駅に向け帰路につきました。バスターミナルにはチケット売場がなく、老圃行のバスも何番の

乗車口で乗れば良いのか分からず探している、50代くらいの男性が出発まで面倒を見てくれました。

バスが入って来る度に私がバスに駆け寄り「このバスは老圃へ行きますか？」と聞いてみると、その男性が「このバスは違う！違う！」と慌てた様子で駆け寄り、何度も世話を焼いてくれました。老夫婦が行先の違うバスに乗り込んでしまうんじゃないかと、余程心配になったのでしよう。おかげで老圃へ無事に戻ることが出来ました。地下鉄の老圃駅からは始発になるので安心して釜山駅に戻って来ました。

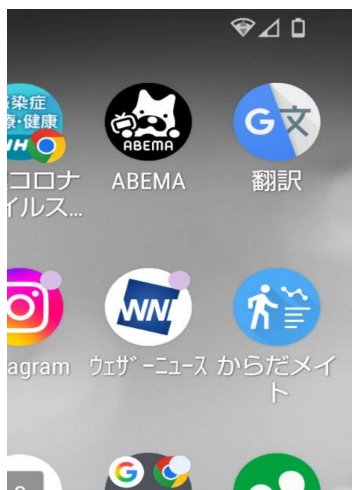
フェリーの出航時間まで釜山駅近くで過ごし、思い出をさらに詰め込もうと気温の高い中を散策して過ごしました。東横インホテルで荷物を受け取ると、釜山港国際旅客ターミナルビルまでタクシード向かい出国時間まで待機しました。楽しかった釜山旅行もあと数時間で釜山を離れる時間です。釜山からの帰路の便は、出国審査のために夕方5時頃には博多に向かう旅客で賑わい始めました。乗船手続きまで約3時間ほどターミナルビルで過ごしました。搭乗口前にはキャリーケースが我先に並び、入場時刻になるとフェリーまでの長い通路を歩きます。一番前

に並んで待つていた老人二人は、フェリーに到着する間に後から並んだ乗客にどんどん追い越されて、それまで何のために並んでいたのかと2人で顔を見合わせました。

8時には乗船が終わりすぐ出航すると思っていきましたが、中々動かず離岸したのは10時過ぎフェリーは博多に向けゆっくり港を後にしました。博多では入国することになるので、早く着いても税関の職員が出社する8時までは上陸が出来ない訳です。船内でゆっくり過ごしながら下船の案内を待つことになりました。

5時過ぎに目が醒めるとフェリーは博多に着いています。6時頃から接岸作業が始まり、7時半に下船し3泊4日の釜山旅行からようやく帰還しました。

今回の釜山旅行前にはスマホに「翻訳アプリ」をインストールして、



会話の壁を乗り越えるための万全の準備をしていました。

音声で入力し、音声で相手に伝えます。事前に想定問答を練習するという用意周到の準備はすべて吹っ飛んでしまいました。地図を検索するGoogleマップも勿論使えませんでした。が、持参したノートパソコンがホテルで使用でき、辛うじてパニックから逃れることが出来ました。

釜山のホテル内はWi-Fiが利用できず、不自由なく使えていたのですが、ホテルから一步外に出るとスマホは全く機能せず、肝心の翻訳アプリが使えないばかりか、インターネットに繋がらない想定外の事態になりました。

帰宅後、スマホの契約先に問い合わせしてみると「海外では利用出来ません。海外で使うには現地でSIMカードを購入して差し替えて利用して下さい。」とのこと。もう少し慎重に



調べておけば良かったと、少々後悔の残る旅行になりました。

ともあれ、無事に帰国出来たことが老人二人には何よりの旅行になりました。楽しかった4日間を思い出しながらの執筆作業が始まりました。



さて、私の原稿はこの会報のギリギリまで掲載を見送り過ぎます。何故かというと、最後の投稿分を掲載し、ピタリ編集が収まるレイアウトになるように編集作業を行うので、私の原稿は最後まで保留してレイアウトの調整用と言うことになります。

自分の投稿がこのまま掲載できるか、または増やすか減らすかは皆様の原稿次第ということになります(笑)

## 窓ガラス

馬場 正明



旧田代家西洋館に訪れた人は先ず「洋館に畳」、「ステンドグラスやガラス越しの歪んだ景色」を不思議そうに見学される。ガラス、特に板ガラスの製造方法の歴史を辿ってこの不思議を少しでも解きほぐせたらと思う。

建築に使われた最古の板ガラスは、西暦79年のベスビオ火山噴火に埋もれたポンペイの遺跡から浴場の採光窓として発掘されており、このことから紀元前1世紀ころから板ガラスが開口部に利用されていたと考えられる。このときの製法は、砂型の中に溶けたガラスを流し込んで固める「砂型鍛造法」とされたが、この製法では均一の厚さのガラスや透明



のガラスは作り難かった。

その後7世紀頃、吹きガラスで作ったガラス生地を竿の先にとり、竿を回転させて遠心力で板状に広げる「クラウン法」が発明された。ガラス生地を竿の先にとった痕が付く、大サイズの板ガラスは作り難かった。

次いで18世紀、産業革命の頃にガラス容器を作るために内側から膨らませる「吹きガラス」の手法を用いた板ガラスの製法が確立する。

これは巨大なガラス瓶の両端を切り落として大きな円筒を作り、長手方向に切り開いて再加熱し板状に伸ばすもので「手吹き円筒法」と呼ばれた。

しかし吹きガラスで巨大な円筒をつくるのは空気の吹き込み量や重量などから過酷な作業であり、歪みの発生は避けられなく、しかも直径30cm×長さ1.5mくらいが限界であった。

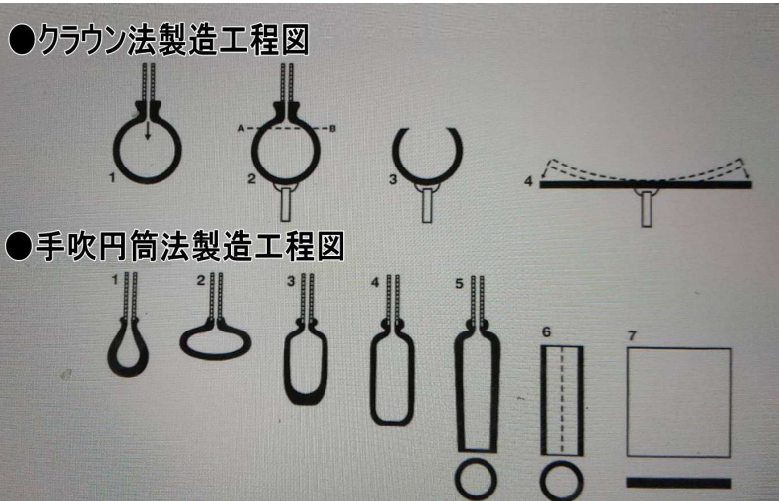
明治の始め頃、日本ではまだ明かり取りは紙障子一般で、ガラスの需要は少なく、手吹き円筒法による板ガラスの試作は行われていたもののうまくいかず明治の始め頃、田代家西洋館など洋館の窓の板ガラスは外国よりの輸入品だった。

十九世紀後半から二十世紀初頭に

かけて板ガラスは大型化と量産化に多くの方法が試みられた。

その中でベルギーのP・フルコールと米国のコルバーンがほぼ同時期にそれぞれ別の方法で連続生産に成功した。どちらも引き上げる時に板状を保つところに革新があり、この二つの方法によって世界の板ガラス産業は連続生産の時代に入っていくようになった。

そしてそのわずか三十数年後、ピルキントン・ブラザーズ社により



二十世紀の大発明のひとつと言われ「フロート製法」の完成につながります。

「フロート」というのは言葉通り、製造過程で「浮かせて」に由来しています。ガラスは比重約二・五の重い材料ですが、それよりさらに重い錫（スズ、比重六・五）の上に1600度の高温で溶けたガラスを流すようにして浮かべます。この部分をフロートバスといい、ここではもちろん錫も溶けていて（溶融温度約232度）、液状の錫の上に溶けたガラスが平らに浮いています、丁度水の上に油を垂らすと水の上に油の膜が出来るように。

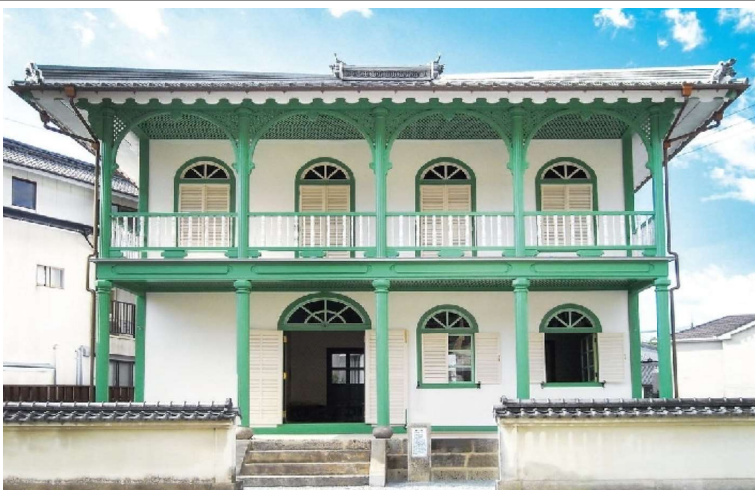
そして溶融ガラスはフロートバスの出口方向に少しずつ移動し、その間に板厚が調整されます。フロートバスに流れ込む量を一定にすれば、早く移動すると薄く、ゆっくり移動すると厚くなるわけです。このスピードはフロートバスより後の工程で硬化しはじめたガラスを引っ張る速さで決められます。ガラスは流れるスピードと重力でいわば自然に成形されます。

そしてフロートバスの中で表裏はほぼ完全に歪みのない平行・平坦な

水平面になって送り出されていきます。

このように、板ガラスの製造方法は時代と共に進化してきました。昔の方法は、現代の技術に比べると手間や時間がかかりましたが、ガラス工芸や一部の建築物には、その独特の風合いから現在でも用いられています。

西洋館の板ガラスも明治を代表する文化財です。末永く大事にしていきたいものです。



## 有田検定のその後

特別寄稿 尾崎 葉子

二〇一六年、有田焼創業四百年という年を迎えるにあたり、佐賀県、有田町を中心に様々な取り組みが行われました。

その中で、何か自分たちに出来ることがないかということで、酒井田祐子さんが有田町の女性たちに声をかけて立ち上がったのが「七葉会」で、手元の手帳を見ると四百年を迎える一年前、二〇一五年二月に最初の会合を開いています。



有田キッズ検定の参加章

四百年事業では取り組みのないような、女性だからこそできるものにし、ましようということで、子どもたちを対象に「キッズ検定(後に有田キッズ検定)」を実施することになりました。まず、検定の内容、問題などを作成するために、有田町内を探索しました。特に、西地区のことには不案内の方も多かったので、藤泰治さんに案内していただき、後にテキスト作成時には大いに尽力いただきました。まさに「黒一点」での大活躍でした。

また、検定は成績に順位をつけるのではなく、有田の歴史、見どころなどを知ってもらいたい。そのために子どもたちには参加章を贈ろう、それには有田らしい、有田でしかできないものをとということで、有田焼のメダルを贈ることにしました。デザインは柿右衛門窯の職人さんに依頼しました。有田町の花である桜の意匠で、焼成は陶悦窯で行いました。メダル焼成後は伸縮自在の紐をつけたり、箱詰め等、七葉会全員でその作業に当たりました。

その後、教育委員会の協力を得て、九月五日から順次、町内四校の小学校でキッズ検定が実施されました。その成績結果はさておき、テキスト

を読んだ保護者からの感想では「親も知らないことが多くて勉強になった」というものがあつて、七葉会のメンバーも改めて取り組んでよかったと胸をなでおろしました。

あれから十一年。今もこの「キッズ検定」は関係者のご努力が続いています。もしかすると数多あつた四百年事業の中でも数少ない継続事業となっているのではないかと自負しています。

夏休みを前に今年もまた、七葉会の皆様と一緒にメダル作りの時間がやってきます。



## あしがき

本年1月は創刊号から前回発行の13号まで全ての会報をまとめ会報誌としてお届けしましたが、編集作業で万全を期していたはずが、入稿で大きなミスをしてしまい、思い出す度に悔しい気持ちを引きずりました。会員の皆様からは私を気遣い、気にしないよう声を掛けて頂いたお陰で何とか立ち直り、今回の会報作業に取り組むことが出来ました。

年2回の会報発行は会員にとっては、日頃からの研鑽を発表して頂く良い機会でもあり、事務局は投稿を楽しみにしています。また半年後の投稿に向けて各々研鑽に励んで頂くことを期待しています。

